

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 吉田 純

清朝考証学とは、西暦一七世紀末から一九世紀なかばにかけて中国学術の主流派を形成した学派で、古代から伝世されてきた文献を、音韻・語彙・文法等の実証的研究手法によって史料批判し、後世の恣意的な読み込みを排除してテキストの原意を蘇らせようという意図をもった学的営為を本質とする。百年前の学術変動の転換期においても西洋伝来の文献学と調和することで、今でもその成果が先行研究として利用されている反面、それ自体が思想史・学術史の研究対象となることは近年まであまりなかった。本論文は、内外の新たな趨勢に棹さして、清朝考証学の性格をその担い手たちの生き様や個性に焦点をあわせて論じきった意欲作である。

著者は「清朝考証学の群像の生々しい〈人間〉像の再現と、中国哲学研究最後の難関である清朝考証学を成立せしめた群像の情熱の根源は何かという問いの解明」を企図し、彼らの「熱気」を掬い取って語ることによって、これまで文献学として評価されてきた清朝考証学を、「人間学」として見ようとする。そのため、従来の研究が彼らの学問の方法や成果を核にすえて分析してきたのに対して、意図的に彼らの伝記や逸話を中心的話題として取り上げ、その人間くささを強調する手法を採っている。

分析対象として取り上げられた九人の学者のうち、閻若璩・紀昀・崔述・翁方綱・劉台拱・汪中・戴震・段玉裁の八人は、いずれも考証学の大家であり、異論の余地がない人選である。最後の龔自珍は春秋公羊学者という分類で近代思想家のはしりとして扱われるのが一般的だが、彼は段玉裁の孫であり、その薫陶を深く受けてもいた。著者は彼を清朝考証学の殿軍として位置づけることによって、中国の学術が大きく変質する一九世紀後半への見通しをつけている。

本論文は著者が過去二十年来書きため、折に触れて発表してきた諸論文を全面的に改稿し、如上の問題意識に沿って整理しなおしたものであり、著者のこれまでの研究が何を意図していたのかが、大きな枠組みとして提示されたものと評することができる。史料解読の精緻さは、研究対象である考証学者たちに全く見劣りしない。引用文の翻訳にも、平易でこなれた日本語としての工夫が凝らされている。

ただし、今回このように整理され、贅肉がそぎ落とされることによって、かつて個別の論文が初出時に見せていた、細部にわたる著者の視点の鋭さはかえって失われてしまったきらいがある。九人の学者たちの取り上げ方や分析視角は、必ずしも整合的に統一されていない。また、カトリックの布教活動によって紹介されたヨーロッパ学術と考証学との関わりにもほとんど触れていない。しかし、本論文はこのような欠陥を有しながらも、世界的に見てきわめて斬新かつ広闊な成果であることは間違いなく、研究史的に今後常に参照されることとなろう。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしい水準に達しているものと判断する。